特集 1

輝く女性たちの本音座談会

ワークライフバランス

東京国税局 調査第一部
国際情報第一課長

生永真美子

平成 17 年入庁。米国留学、外務省国際法局課長補佐、育児休業期間などを経て平成 29 年から現職。

国税庁 課税部
課税総括課 課長補佐

松井めぐみ

平成 15 年入庁。育児休業期間、関東信越国税局調査査察部国際調査課長、古河税務署長などを経て平成 29 年から現職。

現在の業務内容を教えて下さい

松井　国税庁課税総括課で主に国際化・富裕層への対応に関する仕事をしています。具体的には、全国の国税局や税務署で行う海外取引に関する調査や富裕層への調査についての方針を決める部署で働いており、庁内の関係課だけでなく、国税局の関係課とも常に相談しながら仕事を進めています。

生永　東京国税局調査第一部の課長として、「移転価格税制の執行」の責任者として、50名強の職員と一緒に業務を行っています。特別な部署として、存在価値を高めていけるよう、部署全体を見渡し、その「あるべき姿」を自分の言葉で打ち出し、課長として様々な判断を行っています。

自分にも国税庁にも起きた「働き方改革」

松井　私は、長女の出産後、育児休業を約７ヶ月、次女の出産後、育児休業を約４ヶ月取得しました。生永さんはどうでしたか？

生永　私は約９ヶ月の育児休業を取得しました。制度上は３年可能ですが、その当時の保育園の待機児童問題の深刻さを踏まえ、職場に復帰することを見据えると、家の近くかつ認可保育園に入れないことは大きなデメリットであると考えていました。それを踏まえ子供が保育園に入る４月のタイミングに合わせ職場復帰しました。結果的に第一希望の保育園に決まったので、安堵しました。

松井　第一希望の保育園に入れてよかったですね。復帰後はいかがでしたか？私は長女が小学校に入学する前後、保護者会や卒園式・入学式など仕事を休まなければならない行事が多くなり、同僚に負担をかけてしまうと心配していましたが、テレワークやフレックスタイムを活用することで乗り切りました。

生永　復帰後、子供が２歳までの間は、フルタイム勤務はせず、１日１時間の育児時間を活用しました。子供が特に小さい間は、子供が自分で話すことが出来ない分、保育園へのお迎えを通じて、保育園の先生とコミュニケーションをとることがとても重要であったこともあり、保育園のお迎えを優先していました。フルタイムに復帰してからは、私もフレックスタイムを活用し、メリハリをつけた勤務時間で、保育園への定時お迎えや子供との時間を作るようにしていました。松井さんは、子供を持つことで、働き方にどのような変化がありましたか？

松井　今は、子供の有無にかかわらず、働き方も相当変わり、超過勤務が少なくなっています。子供をもったことだけでなく、国税庁の働き方が変わったことも併せて、自分の働き方は大きく変わりました。

　妊娠前は時間が許す限り、納得がいくまで働いていましたが、長女の育休からの復帰後は、極力早く帰るようになり、働き方は大きく変わりました。そのため、前倒しで仕事をすることと、急な子供の病気などで休まなければならないときのために、業務の進捗状況を他の人と情報共有するようになりました。上司・同僚・部下にはいつもサポートしてもらっているので大変感謝しています。生永さんは？

生永　子供が家で待っている状況なので、松井さんと同様、自分の時間に対して更に意識的になり、進捗により厳しくなりました。自分の理想が必ずしも実現できているかどうかは別ですが・・・。時間をかけて仕事を完成させることはできないので、タイムスケジュールを強く意識し、優先順位をつけて処理を行っていくようになりますよね。松井さんがおっしゃったとおり、子供の体調不良などで、自分が不在となる可能性を踏まえ、情報共有を事前にかつ広く行うことの重要性を強く意識するようになりました。

仕事と家庭の両立について

松井　子供が小さい頃は、ご飯を食べさせる・着替えさせるなど直接的なケアが必要ですし、熱やインフルエンザで急に休暇を取ることもあり、親として体力的に大変な時期でした。

　子供が小学生になるとある程度、子供自身でできることが多くなり、勉強や友達関係などに関する心的なケアに親の役目は変わってきました。体力的には楽になりましたが、時間を取って子供の話をきちんと聞くことが重要になるので、仕事と家庭との頭のスイッチの切り替えが今まで以上に必要になりました。仕事と家庭の両立については、どう考えていますか？

生永　私自身、日々の仕事と家庭の両立は、辛うじてできているような印象です。子供の急な体調不良で家庭のことを優先せざる得ないときもあれば、複数の業務が重なり、仕事に注力せざるを得ないときもあるという感じでしょうか。家庭では配偶者や実父母の協力、職場では同僚等の理解と協力を受けながら、日々、個人的な部分と職業人的な部分を両立させていこうと意識しています。

お２人から就職活動中の学生（特に女性）へアドバイスをお願いします。

松井　今は育児を優先するか、やりがいのある仕事を優先するかという二者択一の時代ではありません。多くの職場で、多くのママ達が自分のやり方でやりがいのある仕事をしようと奮闘しています。ワークライフバランスに配慮した組織であるかは仕事をしていく上での一つのポイントになるかもしれませんが、それが最優先のポイントではないと思います。

　まずは、自分が何をしたいのか、どういう人たちと仕事をしたいのかということを考え、それにあった省庁や会社を選ぶことが大事なのではないかと思っています。

生永　今はおぼろげにしか分からない「ワークライフバランス」の重要性は、女性がライフイベントを迎え、かつ、自分の可能性を狭めたくないとの思いがあるときに、ひしひしと感じられると思います。

　仕事を通じて積み上げてきた社会人としてのスキルを有効活用できる環境を持つことは、子育てに伴う閉塞感や社会からの断絶感から解放される方法の一つだと思います。

　あまりに将来のこと過ぎて判断しづらいならば、就職活動では、自分自身の興味関心のある業務ができ、かつ、将来の選択肢が広くもてる会社であるかどうかを意識していくことをおすすめしたいですね。